

連載 千座の置き戸（ちくらのおきど）

第二百七十回 三澤貫一郎先生のこと その一

南出喜久治（令和7年6月15日記す）

三澤先生は、堀川高校の担任の先生で、家業と学業とを両立させてきた高校時代と卒業後における私の心の支へであり、学問よりも政治の道を歩めと示唆していただいた恩人である。

これまで何度か三澤先生のことについて話をしたことがあるが、振り返るたびにいろんなことを思ひ出すことがある。

京都市立堀川高校といふのは、もともと女学校だったので、体育のグラウンドがない。お遊戯程度の広場しかない学校である。北朝鮮に拉致された横田めぐみの母の横田早紀江の母校なので、横田早紀江は私の先輩にあたる。横田早紀江とは、先輩後輩といふ間柄もあって拉致問題にも協力してきた。個人的にも堀川高校の先生のことや同窓会のことが話題になったこともあった。

それはさておき、堀川高校には、グラウンドがないため、体育の授業は、嵯峨野にある京都市のグラウンドまで2時間の授業のためバスで往復する。実際の授業はバスの往復で時間がとられるので正味の授業時間は1時間弱しかない。

このバス代は、個人の通学費なのか授業経費なのか、授業経費なら生徒が支払ふ必要があるか否かが判然としないし、通学費ならば全額生徒の負担となる。これが嵯峨野バス代問題といふ堀川高校が抱へる大問題だった。

当時の公立学校の進学先は、蜷川虎三の共産党府政のために、地域制がとられて、私の住んである地域は、公立であれば堀川高校にしか進学できない。他の公立高校に進学することができたのに、あへて堀川高校に進学したのであれば、バス代は通学費として個人負担として受け入れることになつても不思議ではないが、選択肢がなく堀川高校に進学することになつたのであれば、他の高校ではそんなバス代の負担をすることはないので、堀川高校に進学した者には不公平な負担を強いることなので、授業経費として学校側が全額負担すべきであるといふのが生徒の大勢の意見だった。しかし、市教委は通学費であるとして譲らない。学校側との協議のための生徒大会が何度も開かれ、その紛争を嗅ぎ付けた左翼勢力が集会に紛れ込む。市教委に味方する民青と中核、革マルなどの新左翼が入り込んで激論になる。生徒会の意見を代弁する者は、激しく学校側とこれを擁護する民青と対立した。よど号事件で北朝鮮に行つた吉田金太郎も私も協力して闘つてきた。

この問題は、バス代問題といふよりも、蜷川共産府政の批判が主流となつて行つた。

入学して一年生のときの私のクラスの担任が三澤先生だつた。

そのころの三澤先生の私に対する認識は、激しく政治的意見を主張する危険な生徒と思はれてゐたと思ふ。

その私が、授業中、特に三澤先生の担当の化学の授業では、殆ど寝たままだつたので、鼻もちならない生徒だと思はれてゐた。

ついに、三澤先生から職員室に呼ばれ、嚴重注意された。そのときは一切弁解もせず、ひたすら謝罪した。

ところが、三澤先生に呼び出された上、他の先生が居る職員室で私が叱責されたことを知つた友達が、私が風呂屋の家業を引き継いでゐるために慢性的な寝不足になつてゐるので、理由も聞かずに職員室で公然と叱責するのは可愛そうだと三澤先生に言つてくれたらしい。

さうすると、また三澤先生から呼び出された。そして、家庭事情を詳しく聞かれた。余り言ひたくはなかつたが、嘘は付けないので正直に話した。

一人で風呂掃除をして、それが全部終はつて水張りをして寝ると午前 3 時過ぎになる。それから寝て午前 7 時に起床して登校の支度をして学校に行くので、慢性的な寝不足であることは確かである。だから、つつい授業中に居眠りをする。

すると、三澤先生は、私のことを同情してくれて、それなら化学の授業は出席しなくてよいのでその時間は別のところで仮眠でもしなさい、教科試験だけ受ければよい、と言つてもらつた。

私は三澤先生の温情に感激した。そして、私は、それ以後、化学の授業を一度も休むことなく、確りと目を開けて授業を受け続けた。その代はり他の授業時間で居眠りすることが増えた。友達もこのことは笑つてゐた。

三澤先生から、どうしてそんなことをするのか、と聞かれたので、私は三澤先生のご厚意に感激し、三澤先生の授業を確りと受けたいとの意欲が湧いたことを話した。化学についても強い関心が出て来たことを話した。そして、そのことがあつてから三澤先生とは親密になつて、いろんなことを質問したり相談することになつた。